

## 「京都社寺調査」を始めたころ

伊 東 史 朗

わたしが京都国立博物館に採用されたのが昭和五十四年、文化庁に転任したのが平成十年だから、在職期間は十九年である。そのころ三館だった国立博物館にとって、この間は大げさない方をすれば変動の時期でもあった。昭和五十五年奈良国立博物館に仏教美術資料研究センターが、昭和五十九年東京国立博物館に資料部がそれぞれ開設されたのと相前後して、昭和五十六年四月、京都でも京都文化資料研究センター（以下センター）が発足する。当時の林屋辰三郎館長の方針により、作品の収集・保管・展示という機能のほかに調査研究・資料公開の側面も強調され、学芸課とセンターは博物館業務の主要な二本の柱をになうこととなった。

学芸員の研究発表の場としての機関誌『学叢』の創刊が昭和五十四年、文化財保存修理所のオープンが翌五十五年である。

そのあとは、博物館資料の情報化のよりいっそうの進展があり、また展示棟（新館）・事務棟の改築をひかえて将来構想の検討に入ったのだが、そのころわたしは東京へ赴任した。

わたしはセンターの資料管理研究室に二年、資料調査研究室に前後十三年間いた。そこでの仕事のうち、今でも博物館の主要な事業

である「京都社寺調査」をその最初からたずさわってきた者として、ここでそのころを振り返ってみたい。

\*

センターのできる前、近似の機能をもったのが資料室で、室長は井上正氏であった。彫刻の担当でもある氏は、以前から京都府南部（宇治市・久御山町）の仏像調査を独自に進められており、当時まだ京都府立総合資料館にいたわたしも参加させていただいたものである。その成果が、『学叢』創刊号に載せられた「旧巨椋池周辺の仏像」という論文であり、また昭和五十四年一月四日から三月二十五日まで開かれた特別陳列「京洛仏像の新資料（1）―洛南・洛西―」であった。京都とその周辺地域には、多くのそして当然ながら優秀な仏像があり、それらがまだ研究者の検証を経ないまま残されているという実感にもとづくのであろう、翌年度学芸課長になった氏は継続的な調査の予算化に尽力され、博物館の調査・研究活動の必要性を唱えられていた林屋館長の理解もあって、わずかながらそれは認められたのである。

採用されたわたしにまわってきた最初の仕事がこの「京都社寺調



挿図1 京都社寺調査報告IおよびII

「調査」である。当初は、井上氏の調査したのが府南部だったのでそれを引き継ぐ形で南部から始めた。悉皆調査である。悉皆とは、調査終了時に地域の社寺すべてをカバーしていることを意味するが、同時にその社寺のもっている標準以上の文化財すべてを対象にすることもである。やり方は、まずわたしが各社寺に行つて説明するとともに彫刻の調査をし、さらにほかの部門でよさそうなものがあれば担当者に出張を願う。しかし実態は、小規模の社寺だったためかほとんどが彫刻で占められたことも事実である。翌年度刊行の報告書『京都社寺調査報告I』により対象となった地域を見ると、伏見区

十五カ所、南区一カ所、左京区一カ所と、市南部が多いのは方針通りだが、内容は仏像ばかりである。このクラスの社寺で他部門の参加はありうるのか、調査自体はそれなりに面白いとはいえこの数では日暮れて道遠し、星の数ほどある京都の社寺を考えると呆然とするしかない始まりではあった。

この左京区一カ所というのは大蓮寺である。ここは、祇園社（八坂神社）に明治初年まであった薬師堂（観慶寺）の仏像が神仏分離時に一括して移されたところで、注目すべき仏像群の残されていることが知られたのでつけ加えたのである。旧薬師堂本尊だった薬師如来像は平成五年重要文化財に指定された。

明治二十一年の『宝物取調書』を抄録したと見られる『寺院什器簿』（明治三十年ころ）が博物館に保管されている。京都社寺調査の報告書の体裁は、この『寺院什器簿』の当該箇所をまず掲げ、つぎに記載物件それぞれの下に調査時の所見を書入れ、記載のないものは別に改めて記述するというものだったが、判りにくいことおびただしい。面と向かって言われたことはなかったけれど、おそらく不評だっただろう。しかしこの体裁はしばらく続くことになる。

準備期間のあまりないまま、とにかく手探りで出発した調査であったが、翌年度からは、そのような府南部を中心とする悉皆調査のほかに、そこから離れていても中規模以上の社寺を選び、集中的な調査を加えようということになった。細々としてでも調査を積み重ねるのが悉皆調査の本筋に違いないが、博物館の日常業務に関連づけると、一定の成果が予測でき、そこから寄託出品や特定の社寺をテーマとした展示にもつていきやすい調査をという考えが出てくる。そこで前者を地域社寺、後者を特定社寺・遺跡と名づけ、分けて行う

ことになった。昭和五十五年度の調査対象は、地域社寺では南区一カ所、伏見区二カ所、八幡市一カ所、宇治市一カ所、城陽市一カ所、田辺町（現京田辺市）一カ所、補遺として左京区一カ所（大蓮寺）である。地域は広がったが数は前年度より減っている。ツテのあるところを頼りながら、あいかわらず細々としてではあるが進められた。

いっぽう特定社寺としては宇治市の興聖寺を選び、学芸課員がそろって調査に赴いた。近世のものが主だが、江戸時代に復興された禅寺の文化財をとかくまとめることができたように思う。また特定遺跡は、山科区の安祥寺上寺跡を、当時考古室長だった八賀晋氏が現地踏査と航空撮影により調査し、山上にある二基の仏堂跡を明らかにした。

昭和五十六年四月、京都文化資料研究センターが発足。それまで資料室だったスペースは資料調査研究室となり、また前年の文化財保存修理所の開設にともない、業者が立ち退いたあとの事務棟地下が資料管理研究室の事務室となった。当初美術室員だったわたしは、資料調査研究室長の切畑健氏のもとで京都社寺調査を引きつづき担当し、昭和五十八年度から資料調査研究室員となる。

開始からまだ二年目であったが、センターのオープンということもあったので、昭和五十六年四月十四日から六月十四日まで、特別陳列「京洛仏像の新資料（2）」を新館の彫刻展示室で行った。そこでわたしは、とっておきの目玉というべき大蓮寺の祇園社関係の仏像を一括借用し展示したのであった。

翌年度からの京都社寺調査の内訳はつぎのようである。

昭和五十七年度 地域社寺 伏見区六カ所

特定社寺 壬生寺（中京区）

檀王法林寺（左京区）

昭和五十八年度 地域社寺 伏見区六カ所

特定社寺 成願寺（上京区）

特定遺跡 光明山寺跡（山城町（現木津川市）

昭和五十九年度 地域社寺 伏見区五カ所

特定社寺 尊勝院（東山区）

真正極楽寺（左京区）

昭和六十年年度 地域社寺 伏見区五カ所

特定社寺 放生院（宇治市）

宝積寺（大山崎町）

昭和六十一年度 地域社寺 下京区二カ所、南区一カ所、伏見区四カ所

伏見区四カ所

特定遺跡 方広寺石罍（東山区）

一見して分かるように地域社寺の比率が下がっている。地域の悉皆調査の意義は分かっている。博物館がそれを行う限界であろうか。行政とタイアップしてもっと計画的に行うべきであったろう。つまみ食いにやったせいも、めばしい成果もあがらず、散漫な結果に終わってしまった。ともあれ、将来に向かつての反省もないまま地域社寺を対象とした調査は昭和六十一年度で終了した。

いっぽう特定社寺は、本山級といえないまでも中規模のところを対象として、着実に実績を重ねたといつてよい。その成果として第三回目の特別陳列を開催した。すなわち、昭和五十九年二月二日から二十六日まで、いままでの「京洛仏像……」でなく「京洛寺院の新資料」と改めたこの陳列では、地域社寺のいくつかのほかに、調査

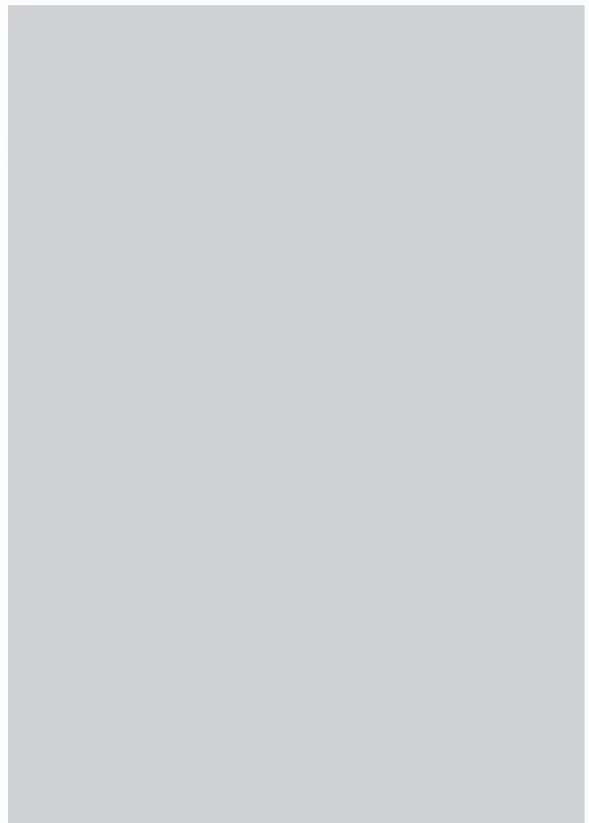
を終えた特定社寺のうち壬生寺と檀王法林寺から多種の作品が並べられた。なかでも壬生寺の壬生地蔵縁起（六巻）はその全貌があまり知られていなかったものであり、また檀王法林寺からの出品では袋中上人が琉球尚寧王から贈られた一群の工芸品が目を惹いた。このような、博物館学芸員が実際に現地へ赴いて有意義な作品を見出しそれを展示するという方法は、博物館活動の新しい形態として注目を浴びた。もう少しあとのことになるが、それをわたしたちはいささか自負気味に京博方式と呼んだものである。

\*

これまでを京都社寺調査にとつての第一期とするなら、翌昭和六十二年度からは第二期と称することができる。第一期で試行錯誤的につかんだ京博方式をもっと大きな対象に向かつてぶつけ、その結果得られた成果は大きかったように思う。わたしは昭和六十三年度に資料管理研究室長となつたので、調査の担当は資料調査研究室長だった灰野昭郎氏に代わつたが、平成二年度に資料調査研究室長となつてから、またわたしにお鉢がまわつてきた。

仁和寺が寺内宝物の調査を望んでいるという情報をもたらしたのは井上氏だったと記憶している。資料調査研究室長だった難波田徹氏はそれを特定社寺の対象とし、さっそくスケジュールを練つた。第一次調査は昭和六十二年五月二十五日から三十日までの一週間が設定され、以後、必要に応じて第二次・第三次を行うことになる。当日朝のタクシーチケットの手配、文房具の用意、昼の弁当をどうするかなど、雑用は資料調査研究室のしごとである。

仁和寺管財課の課長福嶋さん、課長補佐蠣田さんらとの事前の打ち合わせにもとづき、当日、現場では各学芸員が部門ごとに分かれ



挿図2 北院薬師像（国宝） 仁和寺

て、寺の方が次々に出される作品につきノートを取り、要撮影分をチェックする。別に写場を設え、カメラマン金井杜男氏と助手の三原昇氏が要撮影分を部門ごとに撮影していく、と書けばスムーズに運んだように聞こえるかも知れないが、実際は要撮影分が集中してたいへんだったと思う。しかしこつちも必死なのだ。彫刻の撮影がいつもいちばん最後になるのはこのころからである。調査現場のあわただしさはあつたが、いっぽうでは楽しかったという思いがのこっている。

わたしにとって強烈な思い出は、霊明殿に安置されていた秘仏薬師如来像との出会いである。歴代門跡さえめつたな開扉の許されなかつた嚴重な秘仏のこの像を対象とするについては、宗務総長だった吉田裕信師（のち門跡）や管財課の人たちの好意ある勧めもあつたであろうが、ひとえに当時の門跡小林隆任師のご理解と決断に負つ



ている。七月十七日夕刻、初めて拝したときの不思議な感情をいまでも覚えていいる。二重の厨子から出されたその薬師像は予想に反して生々しく、手つかずの過去が迫ってくるようだった。今出来のように新鮮な白檀の木肌、曇りなく輝く截金は、時間の経過を感じさせない。秘仏という好条件にあったにせよ、古色というオブラートに慣れた目には衝撃的でさえあった。製作を終えた仏師が刀を握いた時そのままなのだ。北院薬師というニツクネームのあるこの像は、康和五年（一一〇三）仏師円勢と長円により造立された重要作例であることが評価されて、報告書刊行の翌平成元年に重要文化財、翌々二年に国宝になった。

特定社寺のみとなって最初の試みである仁和寺調査は、さまざまな成果と展望、そしてわたしたち学芸員にとってうれしい余録もたらした。右の北院薬師像を始め、賢聖障子（狩野孝信筆）、細字華嚴経など、従来あまり調査されていなかった多量の資料に接しえたことは大きな収穫であったが、そのほかに、この調査により博物館と寺当局の関係が良好に築かれたことを挙げなければならない。すなわち、膨大な文化財の適切な管理に苦慮していた仁和寺側が、春秋の寺内の展示に一時返還を受けるといふ条件のもとに、それらの寄託を申し出てこられたのである。博物館としては展示に利用できるというメリットがあり、一時返還にしても同じ市内なので何の問題もない。両者のその後の友好関係は、こうしてその時から始まった。

この調査の成功により展覧会開催の申し出が日本経済新聞社からあった。総合展だったので普及室長切畑氏が担当となり、「宇多天皇開創一一〇〇年記念」と冠せられた「仁和寺の名宝」展は、昭和

六十三年五月から六月にかけて実現した。調査の翌年、そして報告書刊行のその年だから、実に素早い対応である。同展は翌年、東京国立博物館へも巡回した。ここに、調査とそれにもとづく展示という博物館活動の根幹をなす両事業が密接にむすびついた京博方式の成功例として、わたしたちの心に誇りをもって記憶されるようになったのである。

仁和寺との友好的関係はそれからもつづき、御室桜の花見への誘いが毎年あり、学芸課・センターの者が大挙しておうかがいしたことなどは楽しい思い出である。

\*

昭和六十二年度からの調査対象をつぎに一覧にしてみよう。

- 昭和六十二年度 仁和寺（右京区）
- 昭和六十三年度 智積院（東山区）、万福寺（宇治市）
- 平成元年度 万福寺（宇治市）、清水寺（東山区）
- 平成二年度 高台寺（東山区）
- 平成三年度 大覚寺（右京区）
- 平成四年度 随心院（山科区）
- 平成五年度 賀茂別雷神社（北区）
- 平成六年度 金戒光明寺（左京区）
- 平成七年度 妙法院（東山区）
- 平成八年度 北野天満宮（上京区）
- 平成九年度 曼殊院（左京区）

本山級がざらりととなり、賀茂別雷神社（上賀茂神社）、北野天満宮といった大社も加わって壮観である。先にも触れたように、調査の方法はまず全員で出向く期間を一週間ほど設け、それでは処理

できないものを第二次・第三次に行うというものであった。平成四年度以降の第一次調査はいずれも年度末の一月、二月だったこともあり、それにつづく調査は春以降にずれ込んで年度内に完結することとはなかった。二年にわたった万福寺調査は、その後行った科学研究費による黄檗美術の研究成果とあわせて、平成五年度、博物館企画の特別展覧会「黄檗の美術」として結実した。

仁和寺で見られた京博方式はその威力を存分に発揮した。「黄檗の美術」のほか、平成四年四月から五月にかけて特別展覧会「大覚寺の名宝」、同六年十月から十一月にかけて特別陳列「上賀茂神社の絵図と文書」、同十一年四月から五月にかけて特別展覧会「妙法院と三十三間堂」、同十三年四月から五月にかけて特別展覧会「北野天満宮神宝展」などが開催されたが、企画のベースはいずれも京都社寺調査である。京都社寺調査にかかわらないほかの共催展でも、まず事前に調査をしない展覧会はありえないというのが京博のスタンスとなった。

もつとも、勇み足のあったことも白状せねばならない。仁和寺で味をしめたわたしは、大覚寺から調査の申込みのあった時点で展覧会にもつていけないかと考えた。調査に当たる学芸課・センターの人たちにその計画を語り、いっぽうではスポンサーとして日本経済新聞社にお願いした。さいわいスポンサーの件は請けていただいたのだが、寺当局にとっては予想外のことだったようだ。依頼した調査に便宜を供し、展示にも多少の協力をしていいが、大規模な展覧会までは考えていない。当然のことである。舞い上がったわたしの責任である。その後、新聞社を入れて話し合い再出発にこぎ着けたが、冷や汗ものであった。

そのころ展示や広報のデザインは学芸員が設計するのがふつうだった。「大覚寺の名宝」の展示に当たって、表裏をなす襖絵紅白梅図・牡丹図(狩野山楽筆)の両面を同時に見せられないかと近世絵画担当の狩野博幸氏に相談し、本館中央室のまん中に宸殿の一部を復元して両方から鑑賞できるようにしたことがあった。ちなみに、その時のカタログの表紙は、実はわたしがデザインしたものである。

ともあれ特定社寺に集中した京都社寺調査の第二期は、学芸課・センターの人たちの積極的な協力を得て順調に動き出し、各所蔵者からも文化財関係者からも認知されるようになったと思う。

\*

以上の調査対象は、わたしが彫刻史専門だったこともあり、寺院では密教系または浄土教系にかたよる傾向があった。しかしわたしのあとは、本法寺(上京区)、三千院(左京区)、建仁寺(東山区)と、日蓮宗や禅宗などの寺院が加わり、また地域も京都に限られなくなり、鉄舟寺(静岡市)までも対象としたと聞く。京都を語るだけでなく京都文化をも語りうる調査の堆積になってほしいと思う。

『学叢』四号(昭和五十七年)のこの稿と同じ欄に、当時の林屋館長の「『寺宝調査』のころ」という随想がある。これは昭和十六年に始まった京都府主宰の「京都府寺院重宝調査」に参加したご自分の体験について思いを綴られたもので、行政による調査の厳しさすさまじさに言及しておられる。この調査は戦時中だったこともあって報告書は刊行されず稿本だけが残っているのだが、その価値はいまも色あせない。市内上京区から始まり郡部に及んで完結したその調査は、わが「京都社寺調査」の地域社寺と同じ悉皆調査である。地域社寺の調査を担当しながらまっとうできなかった者として忸怩

たるものがある。

いっぽう、悉皆調査をまがりなりにやって得た感慨のひとつに、既調査の報告は参考になるが、その報告に出てこない物件も少なくないということがある。調査の目的の違いや時間的制約からそうなるに違いなく、さらには、調査者の専門が異なり関心も変化しているからであろうし、宗教的な事情もあろう。評価については後人の判断するところとして、ここで少なくともいえるのは、調査はいつたん済めば終わりといかないということである。将来の調査者が『京都社寺調査報告』をどのような気持ちで読むであろうか。



挿図3 調査時のひとこま（高台寺にて）